

2015年9月27日「何を重んじるか」

＜ 聖書箇所 ＞ 「ローマ人への手紙 14章3節～10節」

食べる者は食べない者を軽んじてはならず、食べない者も食べる者をさばいてはならない。神は彼を受け入れて下さったのであるから。他人の僕をさばくあなたは、いったい、何者であるか。彼が立つのも倒れるのも、その主人によるのである。しかし、彼は立つようになる。主は彼を立たせることができるからである。また、ある人は、この日がかの日よりも大事であると考え、ほかの人はどの日も同じだと考える。各自はそれぞれ心の中で、確信を持っておくべきである。日を重んじる者は、主のために重んじる。また食べる者も主のために食べる。神に感謝して食べるからである。食べない者も主のために食べない。そして、神に感謝する。すなわち、わたしたちのうち、だれひとり自分のために生きる者はなく、だれひとり自分のために死ぬ者はない。わたしたちは、生きるのも主のために生き、死ぬのも主のために死ぬ。だから、生きるにしても死ぬにしても、わたしたちは主のものなのである。なぜなら、キリストは、死者と生者との主となるために、死んで生き返られたからである。それなのに、あなたは、なぜ兄弟をさばくのか。あなたは、なぜ兄弟を軽んじるのか。わたしたちはみな、神のさばきの座の前に立つのである。

＜ 説教抜粋 ＞ 「何を重んじるか」

今日の説教の題名は、「何を重んじるか」です。聖書は、新約聖書のローマ人への手紙 14章3節～10節です。今日のテーマは、考え方が違う人が、いかに一致するのかということです。「食べる者は食べない者を軽んじてはならず、食べない者も食べる者をさばいてはならない。神は彼を受け入れて下さったのであるから。」。

ユダヤ教には食餌規定というものがあり、信仰に基づき、食べることができるものと食べることができないものがありました。しかし、ユダヤ教徒ではない人にとっては、ユダヤ教の食餌規定は関係ありません。当時の教会には、大きくは二種類の信者が存在しました。

一つは、ユダヤ教の経歴を持つ人たちであり、もう一つは、ユダヤ教とは関係のない人たちです。パウロは、律法主義的なユダヤ教、特に、割礼を痛烈に批判しました。しかし、ここでは、ユダヤ教の風習を差別してはいけないと述べています。宗教には宗教の儀式があります。

こうした儀式は何故あるのでしょうか。それは、結局のところ、神を愛するが故です。行

動様式の違いは、むしろ小さな問題であって、表面的な違いに目を奪われるのではなく、むしろ、根本的な一致点を見いだすべきだということです。

つまり、何を愛するかを中心として、互いに尊重し合う心をもったとすれば、たとえ表面上の不一致があったとしても、より深いところでひとつになることができる道があるのです。